

1

今年度の結果と取り組みについて

(1) 全国学力・学習状況調査

国語

<p>国語A (領域ごと) 話すこと・聞くこと 課題が残る結果であった。</p> <p>書くこと 課題が残る結果であった。</p> <p>読むこと 課題が残る結果であった。</p> <p>言語事項 課題が残る結果であった。</p> <p>(問題形式) 選択式 課題が残る結果であった。</p> <p>短答式 やや課題が残る結果であった。</p> <p>(無解答率) 概ね良好な結果であった。</p> <p>(その他) ・コラムの中で筆者が引用している言葉を書き抜く問題や登場人物の関係を理解し、選択肢から選ぶ問題の正答率が低い傾向にあった。 ・文章の中に入る言葉を選択したり、適切な内容を書き抜く問いの問題の正答率が低い傾向にあった。 ・漢字を読んだり、書いたりする問題は概ね良好な結果であった。</p>	<p>国語B (領域ごと) 話すこと・聞くこと</p> <p>書くこと 課題が残る結果であった。</p> <p>読むこと 課題が残る結果であった。</p> <p>言語事項</p> <p>(問題形式) 選択式 課題が残る結果であった。</p> <p>短答式 課題が残る結果であった。</p> <p>記述式 課題が残る結果であった。</p> <p>(無解答率) 概ね良好な結果であった。</p> <p>(その他) ・新聞の割り付けに関する選択問題、見出しの表現に関する選択問題の正答率が低い傾向にあった。 ・文章の要旨を100字以内でまとめる問題や書き出しの条件がついた要約問題の正答率が低い傾向にあった。 ・条件に合わせて、字数内にまとめる設問や選択肢からふさわしい内容を選ぶ設問は正答率が低い傾向にあった。 ・適切な場面の選択をする問題が低い傾向にあった。</p>
--	--

分析
・国語 AB とともに課題が残った。特に要旨をまとめる、自分の考えを書く問題の正答率が低い。長い文章や資料などが多いと読み切れない。初めて読む文章の量が多すぎて、問題の概要を理解できず、読む前にあきらめてしまう傾向がある。問題の問われ方、解答の仕方が普段のテストにはあまり見られない。

算数・数学

算数・数学A

(領域ごと)

数と計算

概ね良好な結果であった。

量と測定

課題が残る結果であった。

図形

課題が残る結果であった。

数量関係

課題が残る結果であった。

(問題形式)

選択式

課題が残る結果であった。

短答式

やや課題が残る結果であった。

(無解答率)

概ね良好な結果であった。

(その他)

- ・基本的な計算に関しても、勘違いやケアレスミスがあった。計算のルールが定着しきれていない所があった。
- ・分数の四則計算は定着していた。
- ・直方体の展開図などの図形問題の正答率が低い傾向にあった。
- ・時刻を読み取る計算や角度を図る計算の問題の正答率が低い傾向にあった。
- ・図から式を考える問題の正答率が低い傾向にあった。

算数・数学B

(領域ごと)

数と計算

課題が残る結果であった。

量と測定

課題が残る結果であった。

図形

課題が残る結果であった。

数量関係

やや課題が残る結果であった。

(問題形式)

選択式

やや課題が残る結果であった。

短答式

課題が残る結果であった。

記述式

課題が残る結果であった。

(無解答率)

概ね良好な結果であった。

(その他)

- ・図形の特徴を理解する問題は概ね良好な結果であった。
- ・問題文が日常に即したもので、直接的に何を問われているか分かりにくい問題の正答率が低い傾向にあった。
- ・割合の問題の正答率が良好であった。
- ・三角形の図形の特徴についての問題は概ね良好な結果であった。
- ・概数の問題は情報量が多く、整理しにくい問題でしたが、正答率が低い傾向にあった。

分析

- ・数と計算の領域では、比較的全国と比べても落ち込みが小さく、少しずつ積み上がってきている。
- ・文章問題が長く、情報量が多い問題は正答率が低い傾向にある。短い時間の中で、長い文章問題をあきらめずに読み取り、情報を整理できる力をつける必要がある。
- ・何を問われているのかを把握し、的確にその意図を理解して読みとるのが難しい。
- ・基礎基本の部分は到達しているが、その活用、発展となると課題が残る。基礎基本で習得したことを活かせるような授業づくりを考えていく必要がある。
- ・問題を整理して答えに結びつような課題を提示する。
- ・授業では日常生活に即した情報量の多い課題を提示し、グループで課題を解決していく道筋を探究していく必要がある。
- ・基礎基本の部分は、くり返し丁寧な指導が必要である。単元が終わってからも、重要な学習に関してはさらに積み上げていく取組が必要。

理科

理科

(領域ごと)

物質

課題が残る結果であった。

エネルギー

課題が残る結果であった。

生命

課題が残る結果であった。

地球

課題が残る結果であった。

(問題形式)

選択式

課題が残る結果であった。

短答式

課題が残る結果であった。

記述式

課題が残る結果であった。

(無解答率)

概ね良好な結果であった。

(その他)

- ・エネルギーに関する問題の中で、振り子の規則性・電磁石に弱さが見られた。
- ・生命に関する問題では、メダカの飼育・顕微鏡の操作は比較的良好な結果であった。
- ・メスシリンダーの名前、扱い方、物の溶け方などに課題が残る結果となった。
- ・地球に関する問題で、観察を通した問題には比較的良好な結果であった。

分析

- ・資料の多さと文章の長さで、問題の概要が読み取れない。
- ・イラストと問題文の内容を結びつけて考えられていない。
- ・資料、イラストを活用する力をつけていく必要がある。
- ・児童主体の実験、観察を丁寧に行い、誰に発表するかを意識的に仕組み、発信する中で定着させていく。
- ・中学年以降の観察や実験などの内容が、次の学年でつながる場合は意図的に復習できる問題を出して定着できるようにする。
- ・主な実験、観察については定期的に振り返る時間を設け、子どもが夢中になる授業を研究する。

経年比較

全体的な傾向についての分析

- ・上昇傾向から下降傾向に転じている。

学力高位層と学力低位層についての分析

- ・国語、算数のそれぞれで学力低位層が増加し、学力高位層が減少した。
- ・中間層が少なく、二極化が進んだ。

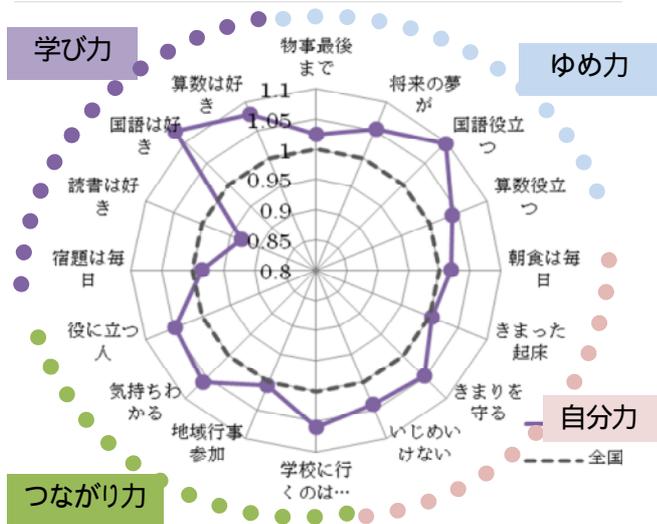
取り組み

学力向上に関する取り組み

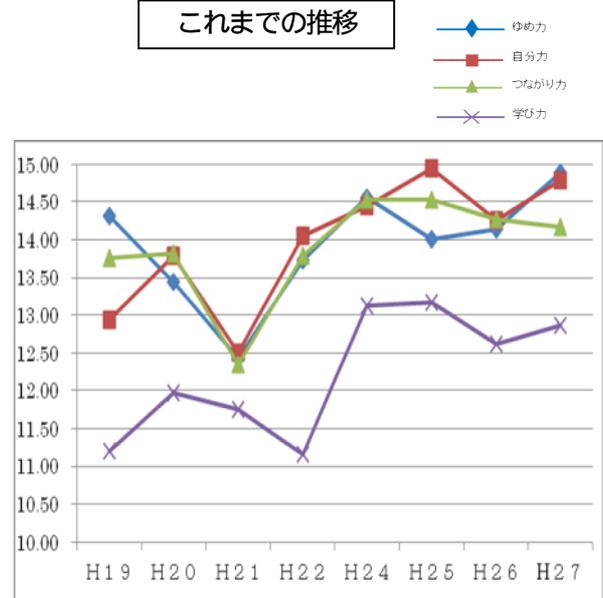
- ・放課後の学びルーム、パンダ教室、なかよし教室における個別の課題に対応した取組を毎日行うことで、学力低位層の底上げや学習内容の定着を図る。
- ・ペア、グループ学習などの聴き合い、学び合う授業づくりを研究し、友だちの意見を聴く、自分の考えを表現するなどの力をつける。ホワイトボード・イエロー個人ボードで班の中での情報の共有、活性化を促す。
- ・ふりかえり週間に年間5回取り組む中で、生活のリズムや学習への態度を養う。学習へ向かう姿勢・準備物などの基盤づくりをクラスで話し合い、自分たちの課題として取り組む。
- ・校内授業研を月に1回全教職員が公開し、学校全体の授業のあり方、目指す授業像の共有化をし、子どもたちにつけたい力や普通の授業を通じての集団作りをする。
- ・授業後の研究会では、ビデオでの授業検証、全員発言、ふりかえりシートの活用によって、教職員集団の教材づくりや子どもをつなぐ視点などを形成する。
- ・授業規律などのスタンダードを学校文化として定着させて、6年間を見据えた共通認識を持つ。郡山スタンダードの下敷きの活用をする。
- ・朝読で落ち着いたスタートをさせるとともに、読書ノート、集団貸し出し、図書委員会の読み聞かせにより、読書の楽しさに触れ、国語力の向上につなげる。
- ・朝の時間に週に1回火曜日に百マス計算に全学年取り組む。
- ・ショートストーリー＝朝読で全員が同じ文章に触れる取組を週に1回取り入れる。5分程度で読める文章を全員で読んで、その後何かが書かれていたかをペアで交流する。
- ・詩の暗唱「響き合い」に全校で取り組み、音読月間を設けて、年間を通した学習と位置付け、授業内や宿題などで活用する。また、全校児童による縦割音読練習や発表会を行う。
- ・全校縦割り学習「こおりやマントタイム」を実施し、高学年が低学年の算数の問題を教える中で、学習に向かう姿勢や優しく関わる力を育む。
- ・自らの学習意欲を高めるために、児童会による低学年の学習会を開き、低学年の学力保障をすると共に、高学年の自尊感情を高め、学習への前向きな態度を養う。
- ・全校で学習に向かう姿勢や習慣づくりを意識させるために、授業がんばろうキャンペーンを児童会から提案し、各クラスで話し合う中で、気持ちよく授業を受ける環境をソフト面で作る。
- ・3校合同授業研（中学校2回、夏季ビデオ研（両小） 両小学校1回ずつ）で同じ視点で授業づくりを行う。
- ・学力保障部会で小中連携を密にし、月に1回顔を合わせて、3校の取組を交流し、情報共有を行う。
- ・自主学ノートの推進 自主学ノートによる勉強への意欲関心を高め、自分から学習に向かう態度を養う。職員室前に掲示し、全校で共有できる取組にする。
- ・書く力の育成 子どもたちにおもしろい作文をシャワーのように浴びせて紹介し、書いてみたいという雰囲気をつくる。書きたくなったら題材を集めて作文を書く。書いたものをクラスや全校で紹介する。

子どもたちに育みたい力

今年度の結果



これまでの推移



分析

- ・読書は好きという項目以外は高い数値となった。
- ・ゆめ力、自分力の数値が大変高く、自尊心の高さや、意欲的な態度が表れている。
- ・つながり力は、下降しているものの高い数値を維持している。
- ・ふりかえり週間などで、生活習慣の部分で一定の成果を得られている。
- ・国語、算数に対する前向きな気持ちや、社会での各教科の有用性についても肯定的である。
- ・学力との相関関係を分析しながら、4つの力が学力や学習態度に大きな影響を及ぼすことを念頭に置きながら、学校全体の取組をすすめる必要がある。

取り組み

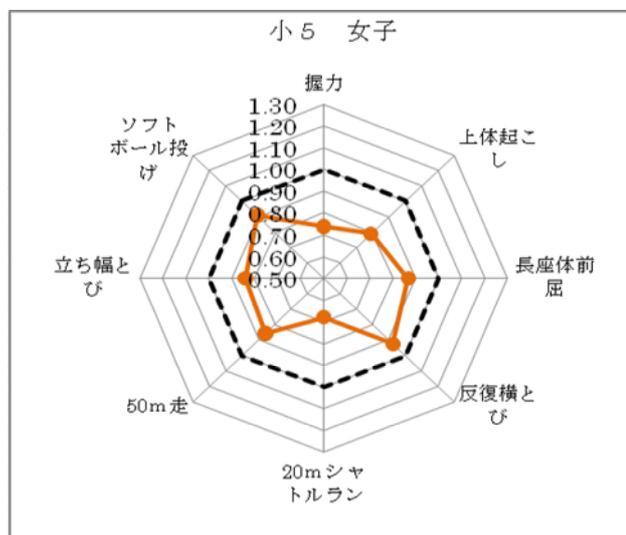
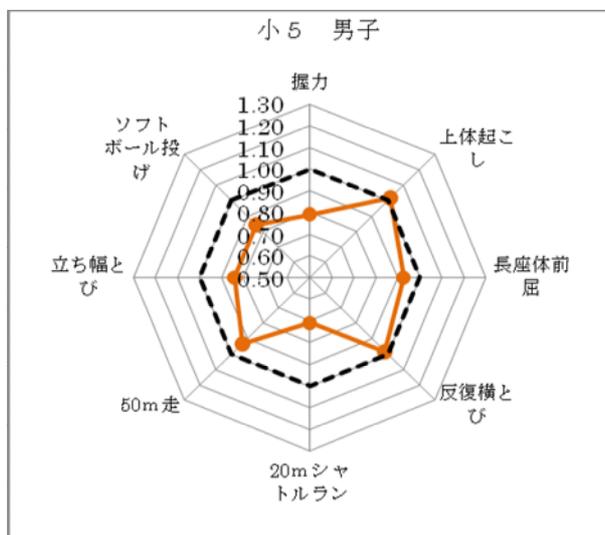
- ・**児童の主体的な活動**を増やす。どんな学校にしたいかを各学年で考えて、その目標に向けて具体的な取組を考える。各種委員会活動を活性化し、児童主体の取組を促す。クラスではマイワークなどの取組を行い、自分の仕事をクラスで位置づけて認められる活動にする。実行委員会の仕組みをつくり、各学年行事も児童主体に動かす。
- ・**人権総合的なカリキュラムの構築**を学校全体で行う。安心ルールやワークを取り入れて、居心地のよいクラス、夢(目標)に向けて努力できる集団をつくる。各学年で取り組む人権総合カリキュラムを作っていく。
- ・**チクチクふわふわ言葉**に全校で取り組む。人権について全校で考える。
- ・**全校縦割り学習**により、高学年としての自覚や低学年にやさしく接する態度を養い、学習の振り返りを行うとともに、学校全体を見る意識を育てる。低学年は難しい課題を一緒に考えてもらいながら学習の定着を図り、高学年のやさしさに触れ、憧れを抱く。
- ・**全校縦割り遠足**を柱にした縦割活動の年間取組によって、高学年としての自覚、行動をモデル化し、異年齢の人間関係を築く力をつける。また、今年度は縦割活動の中に野外活動を取り入れて、自然に触れ、自主的意欲的に活動し、課題に対して道を切り開く力をつける。
- ・**ふりかえり週間**による生活リズムの安定や学習習慣の定着化に取り組み、保護者との共通理解、連携をはかり、地域で子どもを育てる中心とする。
- ・各教科の**授業づくり**で、子ども達が楽しいと思えるような教材設定や活動を取り入れる。日常生活につながる課題をつくることで、主体的に向き合う意欲の向上と課題を解く達成感、有用感を持たせる。授業で集団作りをし、子どもどうしをつなぎ、信頼関係を築いていく。

(2) 全国体力・運動能力、生活習慣調査

体力

男子(小5 中2)

女子(小5 中2)



黒点線・・・全国 オレンジ実線・・・本校

分析

- ・学校全体としては、どの種目も下回っている結果となった。
- ・6年生の結果は男女共に、概ねよい結果であった。
- ・5年生男子の上体起こし、反復横とびの結果が概ね良好であった。
- ・ソフトボール投げの結果が全学年で概ね良好であった。

取り組み

- ・**茨木っ子運動**の活用を全校で取り組む。体育委員会を中心として、茨木っ子運動 から郡山小オリジナルを作り、運動会や授業前に活用し、体幹を鍛える。
- ・**6年間を見据えた系統的なカリキュラムの作成** 各学年で取り組む体育の内容を重なりやもれ落ちがないように作成する。ボール、器械、陸上、水泳、体づくりなど領域の中で縦のつながりを考える。
- ・三角竹馬、一輪車など**器具や遊具の充実化**をはかる。三角竹馬、バランスボール、バランスディスク、運動遊びロープなどを取り入れていく。学級のボールを3種類全て新しくして意欲向上をねらう。
- ・**全校みんな遊び**(朝会、昼休み)を取り入れ、体を動かす機会をつくり、その楽しさを知る。
- ・**こおりやマンカード**(体力向上カード)を作成し、全校児童で取り組む。
アドベンチャー(持久力) トレーニング(敏捷性) 全校みんな遊び(運動する楽しさ) マラソン(持久力) ヤットコ(道具の操作) ラリーの6種類の種目を楽しくゲーム感覚で行い、体を動かす楽しさへの意欲・興味につなげる。
- ・**こおりやマンラリー** 20分休みに全校児童が運動場に出て、6種目の運動にチャレンジする。50m走、走り幅跳び、800m走、鉄棒、なわとび、ヤットコで記録をとる。学期に数回行う。
- ・**校内団地マラソン大会**に向けた継続的な運動を促し、自己記録の更新を目指す取組を通して運動する喜びを得る。
- ・**なわとび週間**に向けた体育委員会主導の活動に取り組み、大縄大会を開催する。
- ・**放課後の校庭開放**による遊び場の確保と、道具貸し出しによる様々な動きを経験させる。

2

3年間の計画

	(各校)	(各校)	(ブロック共通)
	学力向上	体力向上	中学校ブロック連携
目標	聴き合い、学び合う関係をきずく	運動を楽しむ	目指す子ども像から
平成26年度	<p>「聴き合い、学び合う授業づくりの研究。友だちの意見を聴き、自分の考えと比較できる子どもに。人権総合のカリキュラムづくりの整理、共有化。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・校内研の充実、継続した外部講師の招聘 ・縦割り活動の定着。 ・人権総合カリキュラムの整理。 ・学びルーム等の放課後学習の運営の検証。 ・ペア、グループ活動の検証・工夫 ・ふりかえり週間を児童主体の活動に。 	<p>「いろいろな器具・遊具とふれあい、運動の楽しさを知る。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・運動する機会を意図的に増やす。 ・茨木っ子運動の活用。 ・器具・遊具の充実。 ・こおりやマンカード作成。 ・授業研に向けての準備、体づくり運動の系統性。 	<p>幼・保・小・中・高連携の基盤創り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基礎的な生活習慣の定着を進めていくとともに、様々な生活体験を通して心情豊かに、安心して過ごせる集団をつくり、遊ぶこと、体を動かすことが楽しいと思える子どもを育てる。 ・校区全体で、つながりを持って取組を展開し、一人も見捨てず、集団づくりと授業づくりの連携のなかで、全ての子どもたちが、違いを認め合い育ち合う集団をつくる。
平成27年度	<p>「聴き合い、学び合う授業づくりの系統性の確立。友だちの意見から学んだことを自分のものとして活用することができる子どもに。人権総合のカリキュラムの定着化。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・校内研の充実、外部講師の定例化と豊川小学校との実践交流。 ・縦割り活動の定着、回数の増加。 ・人権総合カリキュラムの整理、定着。 ・学びルームなどの放課後学習の検証、形態の模索。 ・ペア、グループ活動の意義浸透。 ・ふりかえり週間を児童主体に取り組む。 	<p>「運動が好きになり、自分からしてみたいなという意欲を育てる。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・こおりやマンカードなど継続した取組。 ・こおりやマンラリー ・反復横跳び・シャトルランの種目の向上。 ・6年間の系統的なカリキュラム作成 ・校内授業研で年間1本は体育で行う。 	<p>保・幼・小・中・高・大連携の強化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各校で行っている授業づくりや校内研において、学力担当者を中心として、積極的に参加する。 ・郡幼稚園の公開保育、研究会に参加。 ・職場体験や生徒会・児童会などの連携行事で交流を深める。 ・保・幼・小・中・高・大での連携を継続させる。 ・内容の検討、ふりかえり、子どもたちへの定着を検証。
平成28年度	<p>「聴き合い、学び合う授業づくりをすべての面で全校同じ方向性で。考え合う中で、自分の考えを持ち、表現できる子どもに。人権総合のカリキュラムを実態に応じて発展変化させる柔軟性。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・校内研、研究会の充実、外部講師の定例化、豊川小学校との実践を共有化。 ・縦割り活動を様々な分野で活性化。 ・人権総合カリキュラムの完成、検証、柔軟な内容変更。 ・学びルームなどの検証、中学への引き継ぎを視野に入れた形態へ。 ・ペア、グループ活動の定着、集団作りの核とする。 ・ふりかえり週間の状態を年間通して意識化、定着。 	<p>「個人だけでなく、ペアやグループでできるようになった喜びを感じられるような授業改善。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童が主体的に体を動かす内容を考える。 ・授業の中で、考えたり・工夫したりできるような場を考えていく。 ・1回1回、子どもたちが達成感が得られる授業の工夫。 	<p>校区全体での連携推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校卒業時点を視野に入れ、豊かな進路選択ができるような、学力・生活習慣の定着。 ・成果と課題の分析。

